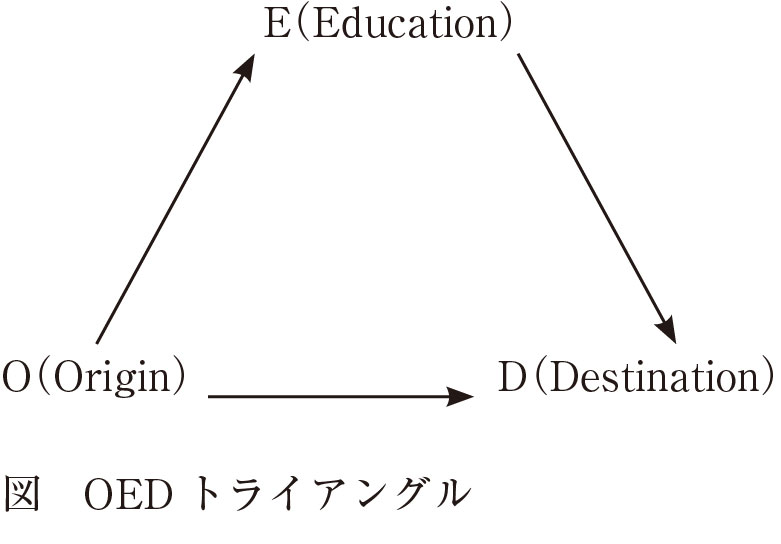
２　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。　〈信州大〉二〇一九年度出題

　出自を重んじる属性主義から、何をやり遂げたかを重視する業績主義へと、価値観が移行して、近代社会は成立した。

　社会階層と教育は、教育社会学でもっとも研　ちくせき　］の多い領域の一つだが、そこでは本人の実績（学歴）によって社会的地位（職業）を獲得できたか、そもそも教育を受ける機会が、出自によっ　かたよ　］っていないかが問われてきた。①階層と教育の関係を端的に示したのが、ＯＥＤトライアングルとよばれるものだ。Ｏは「Origin」（起源、つまり出身階層）、Ｅは「Education」（教育、つまり学歴）、Ｄは「Destination」（到達階層）の略である。階層の指標はいくつか考えられるが、社会学では一般的に職業によって測定される。

　教育制度が存在しない前近代社会は、出自がものをいう社会であった。つまりＯによってＤはかなりの程度決まっていた。属性主義や、帰属主義が支配的な社会である。

　一方、近代化とは、目的合理性（ある社会的、個人的目標に対して、より効率的かつ最大限の成果を求める価値観）を重視する社会となるプロセスである。

　「ある親のもとに生まれた」ことは偶然に過ぎない。また、親が特定の地位や職業にあったからといって、その子も親と同様の適性や能力を保持するとは限らない。むしろ全く関係のない他者が、より高い適性を保持していることもありうる。したがって、試験や資格の有無を通して、その地位や職業への適性を判断する方が、親の地位を引き継ぐよりも合理的だと考えるのが近代の発想である。

　近代社会では、教育を通して知識やスキルを身につける。だから、ある地位にふさわしい知識やスキルを身につけているのか、判断する根拠を教育が提供してくれる。つまり教育の成果は、ある人が知識やスキルを身につけた業績として、社会の中で流通する。こうして社会に支配的な価値観は、業績主義に変わってゆく。機能主義は、以上のような近代社会の価値観を表現したものだ。

　つまり近代社会ではＯとＤの間を、Ｅが媒介する。機能主義的には、ＥとＤの関係が強まるのは当然だ。Ｅという業績によりＤを配分するのは合理的だからだ。そう考えると、日本でよく耳にする「学歴差別」　きみょう　］な言葉だ。なぜなら、学歴はその人の身につけたスキルレベルを示す業績であり、その業績によって処遇の違いが出るのは合理的で、それ自体不当とは言い難いからだ。

　いわゆる「学歴差別」は、学歴を業績とする見方へ　いぎ　］申し立てという側面がある。日本では「学歴ではなく、実力（実績）で評価すべき」とか「学歴が高いからといって、仕事ができるわけではない」という発言をよく耳にする。つまり、学歴（成績）は仕事能力を反映していない、なぜなら教育内容と仕事の関係が強くない、なのに学歴が不当に重視されているという不満が存在するのだろう。

　ただ、ラバレーが社会的効率性の機能を強調したように、教育が地位の配分に全く関係がないのであれば、やりたくもない勉強や試験を乗り越えてまで、受験競争に参入しようとする人はここまで増えなかっただろう。

　すると、教育によって到達階層が決まるならば、教育の役割は大きくなる。だから②教育を受ける機会が平等でなければ、社会的な公正性は保たれない。それだけでなく、人々の潜在能力が社会に広く分布していると仮定するなら、階層によらず、幅広く人材を求めることが合理的だ。したがってＯとＥの間には、当人の生得的な能力や性格、気質、志向性を除けば、特段関連がないのが理想だ。

　しかし多くの実証研究によれば、ＯはＥをある程度規定している。具体的には、大学にいける人は、高所得者や高い文化的背景をもつ家庭の子　かたよ　］っている。これが教育の不平等である。

　教育の不平等の程度は、社会（国や地域）によって違う。社会階層研究では、その不平等が長期的に縮小しているとする見方が、リチャード・ブリーンらのヨーロッパ諸国の比較分析によって示されている。一方で、エルゼベト・ブコディとジョン・ゴールドソープは、出身階層の指標のとり方により分析結果は変わるので、不平等が縮小していると結論づけるのは［　（オ）　］だと批判する。

　このように、教育の不平等をめぐる大局的な趨勢は、必ずしも一致した見解はない。しかし、［　③　］社会は存在しない、という点は、多くの研究者間で同意されている。

（出典：中澤渉『日本の公教育：学力・コスト・民主主義』［中公新書、二〇一八年］より）

問１　傍線部（ア）～（エ）のひらがなを漢字に直せ。

問２　本文の空欄（オ）に入る語句として適切なものはどれか、次の選択肢の中から選べ。

1. 薄弱　　⑵　困難　　⑶　性急　　⑷　稚拙　　⑸　有害

◎問３　傍線部①の「階層と教育の関係」について、筆者は前近代をどのような社会と考え、近代をどのような社会と考えているのかを、日本語のみを用いて一〇〇字以内（句読点を含む）で記述せよ。

問４　傍線部②の「教育を受ける機会」について、筆者が考える平等と不平等を、日本語のみを用いて六〇字以内（句読点を含む）で記述せよ。

問５　空欄③に入る内容を二〇字以内（句読点を含む）で記述せよ。

【解答と採点基準】

問１　（ア）＝蓄積　　（イ）＝偏　　（ウ）＝奇妙　　（エ）＝異議

問２　⑶

問３　Ａ前近代は出自で到達階層がかなりの程度決まり教育と階層の関係は弱い社会だが、目的合理性が重視されるＢ近代では出自よりも業績が処遇に影響し、知識やスキルを習得する教育と到達階層の関係が強い社会である。

（97字）

Ａ＝５〔「前近代は」「出自によって到達階層がかなりの程度決まる」の内容がなければ０。「教育と階層の関係が弱い」の内容がなければ減点２。〕

Ｂ＝５〔「近代は」「出自よりも業績が処遇に影響する」の内容がなければ０。「教育と到達階層の関連が強い」の内容がなければ減点２。〕

問４　Ａ教育を受ける機会が当人の出自と関連がないのが平等で、Ｂ出自に依存した所得や文化的背景によって偏りがあるのが不平等である。（59字）

Ａ・Ｂがなければ全体０。

問５　教育の不平等が完全に解消されている（17字）

「教育の不平等が全く存在していない」「出自と教育の機会との関連が全くない」なども可。